

02

February
2024

[月刊]キリスト教書評誌

本の

HON-NO-HIROBA

ひろば

ISSN 0286-7001

一般財団法人キリスト教文書センター

1957年7月17日第三種郵便物認可

2024年2月1日発行(毎月一回1日発行)第794号

出会い・本・人

父の本棚 小林よう子

特集シリーズこの三冊!

バイオエシックス／生命倫理でいのちと平和を
考えるなら この三冊! 木村利人

本・批評と紹介

宮越俊光著 シンボルで味わう典礼・礼拝 加藤博道

山根道公監修 遠藤周作366のことはば 片柳弘史

浅野淳博著 新約聖書の時代 河野克也

大野高志著 かたわらに、今、たたずんで 原敬子

松本敏之著 神の民の解放 後宮敬爾

川中 仁編 宗教と病 山吉智久

大柴譲治著 聴 議長室から 窪寺俊之

西谷幸介著 改題改訂新版 「日本教」の極点 木村庸五

袴田康裕著

ウエストミンスター信仰告白講解 下巻 坂井純人

◆既刊案内

◆書店案内

説教と神の言葉の神学

カール・バルト 著

加藤常昭／楠原博行 訳

待望の新訳！

「神の言葉の神学」の端緒とも言える1922年の2篇の講演（キリスト教会の宣教の困窮と約束）「神学の課題としての神の言葉」を収録。「神学の課題」としての神の言葉」を収録。「私はこれらのバルトの言葉は今日においても、いや今日においてこそ読まれるべき必読の言葉であると信じている」。(加藤常昭訳者あとがきより)



● B6判・並製・176頁・定価1,980円

好評発売中！

バルト神学の真髄

喜田川 信 著

神学者カール・バルトの「見難解な思想を平易に説き明かし、現代を生きる教会・信徒への示唆に富んだ洞察を提示する珠玉の論考集。バルトの教会論・聖書理解・倫理観を学ぶ格好の入門書。

● 四六判・上製・172頁・定価1,700円

聖書事典の金字塔
待望の復刊！



旧約新約聖書大事典

編纂委員会編

古代言語学・歴史学・考古学・宗教学などの成果を結集し好評を博した大事典が、手に入りやすい縮刷版で登場！ 早期購入特典として、同時復刊の『新装復刻版』聖書地図』を応募者全員にプレゼント(応募締切：2024年4月末)。

● A5判・上製函入・1456頁・定価29,700円

クリシタン文化研究 第30冊 クリシタン1622

殉教・列聖・布教聖省 400年目の省察

川村信三／清水有子 編

クリシタン文化研究会 監修



禁教期における殉教、宣教の動向、民衆の信仰生活、為政者の自己神格化などを採り上げ、当時のキリスト教の実相に多方向から焦点をあてる論集。

● 四八判・並製・369頁・定価3,520円

神の子とする恵み

宗教改革信条案における「神の子」概念再考

齋藤五十三 著



パウロ書簡を起源として、救済論の一側面として発展した「神の子とする恵み」の教理。福音の家族的側面が持つ救済の意味を、宗教改革期前後の信仰告白文書を丹念に検証しながら再発見する！

● A5判・上製・624頁・定価6,600円





父の本棚

父は本が好きな人だった。細菌学の研究者として製薬会社の研究所で働いていたが、それにかかわりなく、家には様々なジャンルの本がつまった本棚が並んでいた。文学、美術、音楽の本、文庫本に新書本、その時々話題になった本。父は若い時から書店で、興味や関心を持って読みたいと思った本を、次々に買っては読んでいたそう。そして、面白かった本については、周囲の人たちに感想を話したり、勧めたりしていたという。

父の本棚に囲まれて育ったわたしは、そこにある本の背表紙を眺めているうちに、世界中の作家や画家の名前、書名や作品名をいつの間にか覚えてしまった。読んでもいないのに、たくさん本を身近に感じるようになり、そのうち自分にも読めそうな本を探して、のぞいて見るようになった。挿絵があると、思っただけで宮沢賢治の本で、それ以来大好きになったり、たくさんあるキリスト教関係の註解書や神学書を眺めているう

ちに、妙に神学者の名前に馴染んでしまったりしていた。

父が亡くなってから、家族の生活の形も大きく変わり、多くの本を手放さなければならなくなった。けれども、父が若い頃を買った、戦前や戦後のポロポロになった古い本の何冊かは捨て難く、今もわたしの手元にある。戦後昭和二十三年に発行されたアテネ文庫は、父の本への思いを聞かされた記念の一冊だ。わら半紙に印刷された本当に薄いその本の最後のページに「アテネ文庫刊行のことば」がある。戦後の貧しい日本にあつて「最低の生活の中にも最高の精神が宿されていなければならぬ」とそこにある。どんなに困窮しても、精神が貧しくならないように、そのため本の出版に努力した人々、それを買って読んだ人々がいて、今がある。自由に本を買い、読むことのできた父は幸せだった。そして、父の本棚から本を読む楽しさや豊かさをお伝えしたのは、大きな宝だと思ふのだ。

(こばやし・ようこ 日本基督教団八戸小中野教会牧師)

小林よう子



▼シリーズ この三冊！

バイオエシックス／生命倫理でいのちと 平和を考えるなら この三冊！

木村利人

(きむら・りひと…早稲田大学名誉教授)

今回のテーマである「バイオエシックス／生命倫理」は、「いのち (bios / ビオス) すなわち、生命・生物・生活」をテーマにした新しい知の領域の総合的研究分野です。

そのルーツは地域コミュニティでの日常的な「いのちを守り育てる」市民の消費者活動や、教会に平和活動家を招いての講演会の共催や、ベンタゴンを囲む反核・平和デモ活動、教会で難民を受け入れ、ホームレスの人々のための食事作りのサービス、地元の病院

やホスピス・ハウスでのボランティア活動などに由来するのです。

これらの市民活動のルーツを背景としつつ、1970年代から展開されたバイオエシックスは、遺伝子研究や臓器移植、体外受精など先端生命医科学研究や医療において、患者をはじめ、専門外の人々、コミュニティの人々が参加するガイドライン作成をはじめ、「生と死をめぐる自己決定」、「インフォームド Consent」、「患者中心の医療」などを実現させたのです。

アメリカやヨーロッパでの「バイオエシックス／生命倫理」の展開では、キリスト教の神学者や牧師が大きな役割を果たしました。既に、1980年代には、例えば、私たち家族が所属していたアメリカ合同キリスト教会 (UCCUSA) の教会 (バージニア州・アーリントン) でも、あらかじめ学習していたせいもあって、エイズに感染した教会員の青年がカミングアウトした時には教会員が暖かくハグしたりして普段通りに受け入れました。その他の教会の教育プログラムには、教会学校の高校生グループには同性愛や妊娠中絶、高齢者には在宅でのホスピス・ケア等のテーマがとり上げられ、私たちも家族ぐるみのボランティアとして参加しました。

更に、教会で夜に行われたバイオエシックス学習会では「遺言書の作成や葬儀の形式」などについても学びまし

た。なお、「末期の在宅がん患者ケアへの訪問ボランティア・ケア」や「がんサポート祈りのグループ」などボランティア活動も展開されていました。

このように「バイオエシックス／生命倫理」には、極めて多様なテーマがあります。今回は、「戦争と平和」に焦点を合わせ、次の3冊の本に学びたいと思います。

第一冊目は「**科学者は戦争で何をしたか**」という本です。この本は、バイオエシックスの重要なテーマの一つである「戦争と科学者と平和活動」の実践の重要性がテーマです。

本書の著者は、「ノーベル物理学賞」を受賞された名古屋大学特別教授・益川敏英先生で、「九条科学者の会」の呼びかけ人でもありました。益川先生は2021年に亡くなりましたが、この本は、一般読者向きの新書で、益

川先生の平和への願いと熱意とがひしひしと伝わってきます。

原子爆弾の開発を含め、多くの科学技術者たちは戦争に協力を惜しまないうちは重用されるものの、その役目が終われば、一切の政策決定から遠ざけられる。「国策で動員される」ということはそういうことです」と益川先生は指摘されました。日本への2発の原爆も開発の当事者たちが、反対の請願書を書いて結局は軍事的・政治的決断によって投下されたのでした。

益川先生は「私にとっては、高みから崇高な理念を発するより、労働者や一般市民に混じって活動する方が居心地が良かったし、手ごたえを感じました。デモや集会に参加することで、種類の違う活動家との出会いもあり、人々の生の声を聴けたことも収穫でした。上からのメッセージも必要ですが、私のように市民に混じって草の根的に

活動する科学者もいてもいいのではないかと思います。」

本書は、まるで「現代の予言書」のようで、今問題になっている学術会議や大学、産学協同などの動向、日本の政治が戦争へと向かう危険性などにも触れています。

「どんなに批判を受けようとも、私はこれからも地球上から戦争をなくすためのメッセージを送り続けたいと思います。」とのメッセージを残された益川先生による「反戦・平和」の志を受け継ぐようにとの決意へと私たちは導かれるのです。

第二冊目は、「父と娘の認知症日記

——認知症専門医の父・長谷川和夫が教えてくれたこと」で、認知症の権威であった長谷川和夫先生ご自身が認知症になられてからの著作で、「本書は、父・長谷川和夫の日記、娘・南高まり

のエッセイ、編集協力者によるインタビュー、引用・参考文献により構成されています」と書かれてあります。

本書を読んでいて、とても印象に残ったのは次の箇所です。

『父の講演会に付き添い始めた頃、話が横道にそれたりすると、声をかけることがあります。講演の時間は限られていますし、父には言いたいことがあるはずなので、それをきちんと伝えられるようにサポートしなければと思っていたからです。しかし、戦争の話になると止まりません。父のなかで「戦争」の2文字は外せないからです。「認知症ケアで大切なことは？」と尋ねると、パーソンセンタードケアについて語るが多かったです。しかし、それが実践できるのは、平和があつてこそで、だから、戦争はしちゃいけない。」「戦争になってしまったら、認知症ケアなんてできないんだから」と戦争

体験の話につながっていくのです。「戦争」「教会」「信仰心」「恩師の新福先生」の話は節目、節目で出てきます。』

認知症になられてからも、先生のお話の中心にあつたのは、「戦争はしちゃいけない」ということであつたことに深く教えられました。

私は、国際長寿センター（ILC）の運営委員会のメンバーとして、長年にわたり長谷川先生共々ILC主催の国内外での会議の企画や運営などに携わつて来ました。いつも、先生の確かな指摘や報告のまとめなどで多くのことを教えられ、先生から折にふれて、「認知症診療の進め方」などの御著書もいただいておりますので、先生ご自身が認知症と診断されたことには大きなショックを覚えました。

先生が、「父と娘の認知症日記」により、認知症患者になつてからも「生きていく限り生き抜きたい」と素晴

らしいご活躍をなされ、その日常生活の状況を日記も含めて、ありのままにこのような著作になされたのは、多くの認知症患者とこれからも患者になるかもしれない私たちにとつての大きな励みです。

2020年の9月17日「絆」で書かれてある長谷川先生の次の言葉に深く教えられました。

「すべて神様の計画のなかにある。私たちが神様を選んだのではなく、神様が私たちを選んだのだ。だから神様のもとに帰るんだ。あくまで神様が主体であつて、こちらは受け身。でも、受け身の準備をしていないといけない。一人ひとり違う人生の流れがあつて、その流れを大切にしないといけない。生きていくうちが一番華だ。明日に比べれば、今が一番若い。だから今を生きるということが華だ。誰かのために尽くしたい。」

第三冊目は、拙著の「戦争・平和・いのちを考える——しあわせなら態度にしめそうよ!」です。

この戦後70年の節目の年に書下ろした小さいブックレットでは、私の少年時代のこと、大学院生の時、フィリピンでのボランティア活動に参加の折り作詞した「幸せなら手をたたこう」という歌の背景、サイゴン大学で2年間教鞭を取っていた時に体験したベトナム戦争と枯葉作戦の実態、そしてスイ



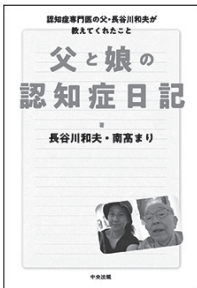
『科学者は戦争で何をしたか』

益川敏英：著
集英社
2015年刊
新書判 183頁
770円

スでの3年間のエキュメニカル体験、中国での「371部隊」の跡地への訪問と調査、最後にいのちのイメージと教会についての考えを述べました。

ロシアとウクライナ、そしてイスラエルとハマスとの戦争が続いている今、私たちは、その悲惨な状況が一刻も早く終わるようにと願っています。

この状況と重ね合わせて、かつて日本軍がアジア・太平洋地域諸国の人々に与えた悲惨な状況を思うと、私は深



『父と娘の認知症日記 ——認知症専門医の父・長谷川和夫が教えてくれたこと』

長谷川和夫、南高まり：著
中央法規出版
2021年刊
四六判 178頁
1,430円

い悲しみに襲われます。昨年、「ピース・ポート」で地球一周をした時に香港したマニラの国立美術館には、日本軍による殺戮の絵画や死のバターン行進の彫刻などがあって、息を呑んで立ちすくんでしまいました。

私は、本年九十歳を迎えましたが、今後とも真の和解と平和のために祈り、主に在って活動を続けていきたいと願っています。



『戦争・平和・いのちを考える ——しあわせなら態度にしめそうよ!』

木村利人：著
キリスト新聞社
2015年刊
A5判 110頁
1,100円

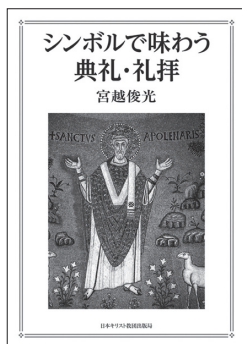
教派を超え神の臨在を証しする 典礼・礼拝の諸要素に親しむ

〈評者〉
加藤博道

季刊誌『礼拝と音楽』（日本キリスト教団出版局）は、国内唯一と言える歴史ある礼拝と音楽の専門誌であり、礼拝の神学や実践、教会音楽について毎号充実した論文や記事を掲載している。本書はその『礼拝と音楽』誌の二〇一四年夏号から二〇二二年冬号にかけての三〇回にわたる連載をまとめ、タイトルも連載時の「礼拝とシンボル」から改めたもので、著者は日本カトリック教会において重要な働きを担う典礼学者である。

典礼・礼拝におけるシンボルという主題は、各教派によってかなり理解や実践が異なるもので、宗教改革以降、分裂さえ招いたような事柄でもあるが、著者はカトリック教会の視点を中心としつつも、同時に多様な伝統があることを常に念頭において配慮を持った記述をしている。

全六章で扱われる事柄は七〇項目に近く、すべては紹介



シンボルで味わう
典礼・礼拝
宮越俊光著



出来ないが概要は以下の通りである。（第一章 所作・動作）立つ、座る、オランス、礼、接吻、胸を打つ、行列、（第二章 諸秘跡の典礼）パンを裂く、浸礼・滴礼、按手、塗油、歌う、沈黙、（第三章 典礼暦）主の日、典礼色、アドヴェント・クランツ、プレゼビオ（飼い葉桶）、40日、洗足、8日目、（第四章 祭服）アルバ、ストラ、ミトラ、パリウム、（第五章 祭器・祭具）パテナとカリス、祭壇布、朗読用聖書、ろうそく（ランプ）、香、灰、受洗者の白衣、十字架、聖水、（第六章 礼拝の場）祭壇（聖卓）、聖書朗読台、説教台、聖櫃、洗礼盤・洗礼槽、東と西、等々。それぞれについて、聖書的な背景と歴史的な発展や変化、とくにカトリック教会においては第二バチカン公会議（一九六二年から六五年）の典礼刷新に伴う変化、そして日本の文化や環境における適応についても丁寧述べら

れている。とくに二〇世紀における典礼・礼拝の刷新は、教会論、サクラメント論、会衆の行動的な典礼・礼拝参加の強調、典礼・礼拝の場の刷新等、広範な出来事であり、さまざまなシンボルに対しても無関係ではありえない。

「古来、多くの文化や宗教は、人間が神的、超越的、神秘的な何ものかを捉えるために、人間の感覚で理解できる自然物や画像やしぐさなどをシンボル（象徴）として用いてきた。シンボルは「それを用いる人々がシンボルの示す意味についての共通理解をもっているときに機能し、共同体のきずなを深める」。キリスト教においては何よりも「わたしを見た者は、父を見た」（ヨハネ十四・九）という言葉の通り、「イエスの生涯が最も根本的なシンボルとなり、神との出会いへと招く」（三一―四頁）。そうであれば教

会の中の種々のシンボルも、すべて神の救いの計画、キリストの超越の秘義（受肉・生涯・死と復活）にこそ関わり、それを指し示そうとしているのだと再認識した。そして神の民の典礼・礼拝それ自身が、神の臨在を証しする中心的なシンボルであること、それは教派を超えた教会の存在理由ではないだろうか。先に教派的な伝統によって理解や実践が異なると書いたが、むしろ共有している大切なシンボルの方が多いと気づかされる。イラストも含めて親しみやすく連載中から愛読していたが、今こうして一冊にまとまり全体を通してみると、本書はこれまでにない典礼・礼拝のシンボルに関する総合的で充実した一冊となっている。

（かとう・ひろみち「日本聖公会主教」
（A5判・二四八頁・定価三〇八〇円・日本キリスト教団出版局）

ヘンリ・ナウエン 傷ついても 愛を信じた人



20世紀を代表する霊的指導者ヘンリ・ナウエン。現代世界で傷だらけになって神を求め続けた、その生涯と信仰を、ナウエン研究の第一人者がわかりやすく描く。神の愛が見えにくく、魂の飢え渴く今こそ、ナウエンに聴こう！ ナウエンファン必読の書。
四六判並製・168頁・定価1980円

すべての命に平和を 剣を打ち直して鋤とする2



菊地 謙
世界各地で戦争の相次ぐ現代。長年山谷の地で伝道を続け、高齢化した元・日雇い労働者の「食」に携わる著者が、戦争に突き進んだ近代日本を振り返りつつ、「平和」の道を考える。
四六判並製・232頁・定価2860円

日本キリスト教団出版局
〒169-0051 東京都新宿区西早稲田2-3-18
☎03-3204-0422 ☎03-3204-0457
E-mail eiyou@bp.ucci.or.jp (価格10%税込)
<https://bp-ucci.jp>

人間の弱さに 寄り添うイエス

〈評者〉片柳弘史



遠藤周作
366のことば

山根道公監修



遠藤周作研究の第一人者として知られる山根道公^{みちひろ}先生が、遠藤周作生誕百年の節目に当たって編さんした一日一言の言葉集。遠藤氏と共にフランスに留学し、生涯の盟友であった井上洋治神父の弟子として、生前の遠藤氏とも親交が深かった山根先生ならではの絶妙な言葉選びで、遠藤文学の一つの集大成といつてよい作品に仕上がっている。『沈黙』『イエスの生涯』『侍』『深い河』などの代表作だけでなく、エッセイ集や日記などからも幅広く引用されており、一日一言の短い言葉を読むたびごとに、遠藤氏の作品が一つひとつ思いだされる。

キリシタン迫害を描いた『沈黙』を頂点とする遠藤文学に一貫して流れるテーマは、「人間の弱さに寄り添うイエスの愛」だといつてよいだろう。『沈黙』に描かれたイエスは、苦しみの中で踏絵に足をかけようとすると司祭に「踏

むがいい」と語りかけ、司祭の苦しみを共に担うイエス、人間と一緒に苦しむことで人間を救うイエスだった。この本にも、そのテーマが貫かれている。この本に収められた言葉の一つひとつが、人間を罪人として裁く神ではなく、弱いわたしたちがあるがままに受け入れる愛の神へとわたしたちを導いてくれる。

遠藤氏が描くイエスは、奇蹟など行うことができない、まったく無力なイエスだ。本書で引用されている言葉の中にも、無力な人間の苦しみを共に味わう無力なイエスの姿がたびたび登場する。相手と共に苦しみを担う者だけが、相手を愛することができる。人々を救うために「必要なのは『愛』であって病気を治す『奇蹟』ではなかった」と考える遠藤氏にとって、イエスはどうしても無力である必要があったのだ。無力なイエスは、わたしたちを裁くことが

ない。イエスは、わたしたち人間を愛するため、愛することによって救うために遣わされたという遠藤氏の信仰。その信仰に基づいて発せられた一つひとつの言葉は、どこまでも優しく、わたしたちの弱さに寄り添ってくれる。遠藤氏の言葉自体に、イエスの救いの力が宿っているといってもよいだろう。

遠藤氏は、母親から譲り受けたキリスト教の信仰を自分の体に合わない洋服のようだと感じ、その洋服を自分の身の丈に合うものに作り変えることに生涯をかけて取り組んだ。「日本人の心に合うキリスト教」を求め続けた生涯だったといってもよいだろう。その結果としてたどり着いたのが、あるがままの人間をゆるし、受け入れる神であり、人間の無力さと無力さから生まれる苦しみを共に担うため

に、まったく無力な者となったイエスだった。日本の宣教の歴史を振り返って、遠藤氏ほど日本社会に広く、また深く受け入れられたキリスト教徒はいないといってもよいだろう。その事實は、遠藤氏がたどりついたキリスト教の姿こそ、日本人の心に合うキリスト教に近いことを示している。この本の中には、二十一世紀の日本にあってキリストの愛を人々に伝えようと努力するわたしたちにとって、ヒントになる言葉がたくさん詰め込まれているといってもよい。山根先生が編んでくださったこの本は、自分の信仰を見つめ直すためにも、宣教のための手掛かりを探すためにも最適の一冊といえる。

(かたやなぎ・ひろし イエス協会司祭)

(四六判・一六〇頁・定価一九八〇円・日本キリスト教団出版局)



新しい人 新しい言葉

戦後日本のキリスト教詩人たち

木下裕也
KINOSHITA Hiroyo



「古い人から新しい人へ」
——戦後日本を生き延びたキリスト者詩人たちに光をあて、その新しい言葉を牧師であり詩人である著者が真摯に解き明かす。
(時澤博)

四六判・並製
定価 1,980 [本体 1,800 + 税] 円
ISBN978-4-86325-153-3



株式会社 一麦出版社
札幌市南区北ノ沢3丁目4-10
TEL (011) 578-5888
<http://www.ichibaku.co.jp>
携帯 mobile.ichibaku.co.jp

歴史を学び、「今」を生きる

〈評者〉河野克也



新約聖書の時代

アイデンティティを模索する
キリスト共同体

浅野淳博著



本書は、関西学院大学教授として長年「新約聖書時代史」を講じてきた浅野淳博氏が、新約聖書の歴史的・社会的背景について「初学者の入門とそれ以降の学びを導くのに相応しい著作」として著したものであり、実際の教室における誠実な試行錯誤が蒸留された実に行き届いた教科書である。しかし本書は、単なる新約聖書の歴史的・社会的背景についての解説書ではない。むしろサブタイトルが雄弁に語るように、イエスを主・キリストと告白する者の共同体が、その具体的な歴史的・社会的状況の中で自らのアイデンティティを模索していった様を、幅広い資料を丹念に読み解き、時に大胆に想像力を働かせながら描いた書である。さらに言えば、このサブタイトルでもまだ十分ではないかもしれない。というのも、本書の最大の特徴は、初期のキリスト共同体のアイデンティティの模索を描くこ

とを通して、現代の私たちがどのように自らのアイデンティティを構築すべきかについて極めて深刻な問題提起をしている点にこそあるからである。氏はそのことを「はじめに」(三頁)と「プロローグ」(一九―三二頁)において読者に丁寧に語りかけ、さらに各章の最後に「新約聖書の時代から学ぶ」というセクションを設けて、過去と現在を著者自身の経験というフィルターを通して結びつけることでその学びの一例を提供し、「エピローグ」ではアマルティア・センのアイデンティティの複数性の概念を手掛かりに、他者を受容するアイデンティティの構築を呼びかける。したがって読者は、同じように各章の内容を踏まえて自分自身でこの問いを問い、自分の言葉で回答するように促されるのである。個人的にはこのセクションに散りばめられた現代の日本の状況に対する厳しい批判に何度も深く



W・ロス・ヘイスティングス 小山清孝訳 死との和解の神学 悲しみに壊れた心はどこへ行くの？

人の悲嘆、傷み、喪失を、(三位一体の神)から語りかける。牧師である著者自ら体験した、愛する者(妻)との別れ、傷み、悲しみ。それらを通して、人の(愛着と喪失)の心理学的理論を、(三位一体の神)における愛と交わりの真理への架け橋としてつなげていく。壮大な神学的アプローチ。
●四六判・二八八頁・二〇〇円

領きつつ、同時に自らの信仰の姿を顧みて落ち着かない気持ちにもなった。それは本書が単なる情報伝達の書ではなく、実存的な応答を促す書であることの証左であろう。

本書はイエスを主と告白する者たちが「キリスト教」としてのアイデンティティを形成していく過程を、三部構成で辿る(第一部「列強支配下の第二神殿期ユダヤ教」、第二部「初期のキリスト共同体」、第三部「二つの戦争とキリスト教の誕生」)。近年の多様な方法論による成果を広範に取り入れている点は本書の重要な貢献である。大胆に想像力を駆使する点もまた魅力である。パウロの「回心」についての読みはその一例であろう。ステファノ殺害への関与がトラウマとなり、パウロの内面においてユダヤ民族の歴史からくる被害者意識と加害者意識のせめぎ合いが生



金子晴勇 隠れたアンテナ効果とは？ 「良心」の天路歷程

良心は、単に道徳意識の源泉であるにとどまらず、人間の生存と存在の根源(靈性)に深く根を下しているのではないか？古今東西の宗教、哲学、文学における著者ならではの縦横無尽なフィールドワークの集積によって新たな「良心論」が誕生！●四六判上製・二九六頁・一九八〇円

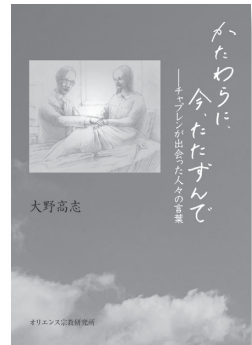
じ、そこから当時の黙示思想の潮流である「メルカヴァ神秘主義」に傾倒し、その修練の中で神から「御子の啓示」を受けたとする(二九八―三〇〇頁)。メルカヴァ神秘主義の名称は、エゼキエル書一章の幻において神の栄光を運ぶ車輪を指すヘブライ語に由来する。メルカヴァが古代騎馬戦車を指すヘブライ語だったとしても、それが現在ガザで虐殺を遂行するイスラエル軍の主力戦車の名称になっていることは、もはや冒瀆的ですからある。とはいえ、日本もまた隣人たちを侵略した過去を持つ。私たちは、他者を暴力的に排除するアイデンティティの構築と訣別できているだろうか？

(かわの・かつや II 東京神学大学特任准教授
(四六判・四八四頁・定価四六二〇円・教文館)

ヨベル YOBEL Inc. info@yobel.co.jp
〒113-0033 東京都文京区本郷4-1-1-5F
TEL03(3818)4851 FAX03(3818)4858
出版の手引き / 呈 (税込)

生と死のはざまでの 在りようを教える

〈評者〉原 敬子



かたわらに、今、
たたずんで
チャブレンが会った人々の言葉
大野高志著



「こんにちは。初めまして。この病院の牧師です」と
言つて、大野高志先生はチャブレンとして病棟の患者さん
のお部屋を訪問されます。自然に、まるでそよ風がふつと
窓から入ってくるように、患者さんのそばに「たたずむ」
ために、病室を訪れます。併設されている特別養護老人
ホームや介護老人保険施設、そして、ホスピスも訪問し、
皆さんの声にじつと耳を傾けていらつしゃいます。患者さ
んたちが語られる声に耳を傾け、患者さんたちの声にもな
らぬ心の声に触れ、大野先生はただ一心に神に祈ってい
らつしゃる……。本書は、そんな大野高志先生のチャブレ
ンとしての日々の生活の一場面に、読者のわたしたちをも
招いている、そんな本です。

チャブレンシー、パストラルケア、スピリチュアルケア、
そして、近年、グリーンフケア、臨床宗教師と、さまざまな

呼び名で生老病死の現場にかかわるワーカーの方々のお仕
事があります。医療従事者、介護福祉でお働きの方々、ま
た、教育現場に関わる方々でさえも、人間は生と死のはざ
まに存在し、単に生物学的、あるいは心理学的に割り切れ
るものではないということを、常日頃、考えざるを得ない
だから、ますます、こういった領域のフォーメーション
(養成) が求められているのだと思います。

キリスト教には古来、メメント・モリ(死を忘れるな)
という言葉があり、生と死のはざまに生きる人間存在につ
いて内省するよう人びとに求めてきました。人のいのちの
儚さを「今日は野にあって、明日は炉に投げ込まれる草」
(ルカ12・28)になぞらえつつも、それでも、神さまが人
間をどれほど尊ばれているか、どれほど美しく装ってくだ
さるかを想像たくましく考えよというわけです。つまり、



渡辺善太著作選集 ⑮
 新書判・二八〇頁・定価一九八〇円

善太先生「教会と政治」を語る

話題の復刊！
 教会の正典たる「聖書」は、「政教」をどう教えているか？ 福音宣教の使命に専心する福音派も、政教一致をめざす社会派も、教会のあり方としてはいずれも聖書的ではなく、誤謬に陥っている、と大胆にも善太先生は喝破する。ではそのいずれでもない第三の道があるのか？ それは何か？ 直言に満ちた善太節を、いざ堪能！

朗らかに生きていたその瞬間も、死のリアリティをおまえの身に内包させておくようにという、これはひとつの戒めなのだろうと思うのです。

わたしは読了後、著者、大野先生はもう彼岸に足を一歩踏み入れておられるのではないかと感じてしまいました。生者の世に片足を残しつつも、死者の交わりの中にも片身（からだ半分）は入っておられるのではないか。そのように考えますと、まさに、大野先生は現代におけるメモント・モリの実践者。生と死のはざまでの在りようを教えてくださいださる方です。

ある患者さんは「先生ありがとうございます。私は明日、逝きます」と言って、ほんとうに翌日、息を引き取られます。まるで「いつてらっしゃい」とでもおっしゃられる

大頭眞一と焚き火を囲む仲間たち
 四六判・二四〇頁・一八七〇円

聖化の再発見 シバング篇

「先生の前で『きよめ』で困っている人というのがあるでしょうか。えっ、いきなり、そこですか?! こちらがたじろぐ直球でスバズバ切り込み、現代に生きるキリスト者の聖化(きよめ)の問題を生活の最前線で解明せんと欲す。好評を博した『聖化の再発見』を日本に根づかせる希望の模案が『シバング篇』へと結晶。

ヨベル YOBEL Inc. info@yobel.co.jp
 〒113-0033 東京都文京区本郷 4-1-1-5F
 TEL03(3818)4851 FAX03(3818)4858
 出版の手引き / 呈 (税込)

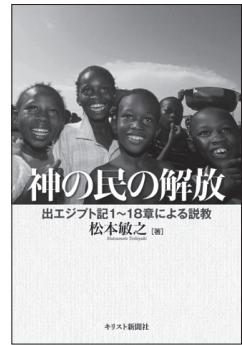
そんな大野先生の柔らかな表情が目には浮かびます。もちろん、本書の中で幾度となく書いておられるような「書けない」「届かない」ご経験も想像できます。しかし、生と死が断絶ではなく、連続した一本の道の途上における決定的な出来事なのだということを、本書によってわたしは強く実感させていただきました。

大野先生がこの道の途上で神さまに祈ってくださっているように、わたしもたたずむ、わたしも聴く、わたしも祈る……。本書はキリスト教霊性の伝統を脈々と継承する実践神学の書として多くのスピリチュアルケア・ワーカーの元に届けられるでしょう。

(はら・けいこ 上智大学神学部教授
 (B6版・二五六頁・定価二三一〇円・オリエンス宗教研究所)

混迷の時代の 出エジプト記ガイド

〈評者〉 後宮敬爾



神の民の解放

出エジプト記一〜一八章による

説教

松本敏之著



二〇二三年十月以降、メディアは連日、ガザの病院で死を待つほかない状況に追い込まれている赤ちゃんの映像を映し出しています。この現実を目の当たりにするとき、出エジプト記を読むことを躊躇する人は少なくないでしょう。

出エジプト記の前半のもっとも大きな出来事は、エジプトからのイスラエル民族の解放です。次々と起こる災いにも頑迷に解放を拒否し続けたファラオが、最後に認めることになるのは「初子の死」でした。イスラエルが解放されることは大事なことでと頭では理解しつつも、そのために犠牲になった無垢な子どもたちの死について、そしてその家族の悲しみについて、どう理解すべきなのかという問いが脳裏に絡みついてくるのです。

そのような人にも、お勧めしたいのが本書です。本書の特徴は、読者に「まるでドキュメンタリードラマを見ている

かのような」読書感を与える説教集だということです。説教者は、今の時代を生きて、その現実の中で困り、悩み、問い続けながら、出エジプト記と格闘しているのです。その緊迫感と臨場感を生々しく感じながら、出エジプト記が語られていきます。

著者が牧会する鹿児島加治屋町教会で二〇二〇年一月から二〇二二年六月に語られた連続講解説教を土台とした説教集で、本書には出エジプト記一章から一八章までを範囲として二十三の説教がおさめられています。

ちょうどこの時期は、世界中の教会が新型コロナウイルスの脅威にさらされ、教会にも緊急対応が内外から求められた時でした。その求めは、礼拝を問い、説教を問い、教会共同体の存在を問うものでした。

著者は、その緊急事態の中に身を置きながら出エジプト記

病・苦難や差別との向き合い方を問う

〈評者〉 山吉智久



宗教と病
聖書の信仰の観点から
川中 仁編



本書は、二〇二二年一月に上智大学キリスト教文化研究所主催の聖書講座「宗教と病——聖書の信仰の観点から」をもとに、三人の講師による講演がまとめられたものである。当研究所は、キリスト教を幅広い視野から考察することを旨とし、特定の主題を設けて超党派で講師を招く聖書講座を開催して、翌年にその内容を出版する活動を毎年続けており、本書もこの営みによる成果の一つである。

二〇二二年度の聖書講座の主題「宗教と病」は、二〇二〇年春に始まり、世界中を混乱に巻き込んだ新型コロナウイルスのパンデミックを受けたものである。このコロナ禍によって、人類は医学をどれだけ発展させようとも、未知の病に対していかに無力であるかを思い知らされた。この危機を前にして、世俗化が進む現代において、宗教がなお果たし得る役割について、改めて問われることにもなっ

た。本書に収められている三つの論考はいずれも、本書の副題が示すように、人類と病との向き合い方について、「聖書の信仰の観点から」何が語れるのかという問いに答えようとしたものである。

並木浩一氏による「旧約聖書の人々は病とどう差し向かったか」から学ぶのは、病からの解放を目指す人間による医療行為が、神による創造の業の継続と見なされることで、信仰との調和がはかられるようになったということであり、両者が本質的に対立関係にはないということである。本多峰子氏による「イエスの癒し——病、穢れ、悪霊憑きについての新約時代の見方とイエスによる癒しの救済的意味」から学ぶのは、イエスによる病からの癒しが、癒される者の信頼に対する神の憐れみと恵みの業であり、それは癒された者にとって病からだけでなく、「罪人」や「穢

黙想シリーズ

ひと時の黙想

心の貧しい人とは

聖書協会
共同訳



ブレナン・マニング(著・文)
山崎雅郎(写真)

心の貧しい人々は、幸いである
天の国はその人たちのものである

「神と真の友になる人とは、
主の前にある自らの貧しさを
思い知った人のことです。」(本
文より)

アルコール依存症を患う自分の
弱さや失敗を、隠すことなく
語ったことで知られたマニング。
本書が初の邦訳です。
神の前にある自分の貧しさを
知り、ただ主に憐れみを乞う人
に注がれる、神の大きく激しい
愛を語ります。

1日1ページ、365日の御言葉と
メッセージ。

合成皮革装・スリーブケース入り

判 型: 天地135×左右103mm
頁 数: 416頁
ISBN: 978-4-8202-9286-9

定価**2,200円**

(本体2,000円+10%)

お問合せ ☎03(3567)1987(頒布部)
<https://www.bible.or.jp>

れ」と見られていた偏見からの解放でもあり、そこにイエスの逆説的な使信が見出されるということである。

角田佑一氏による「マタイ福音書における二人の盲人の治癒」から学ぶのは、マルコ福音書における一人の盲人の治癒物語が、マタイ福音書では「二人」とされたことで共同体性が獲得され、この治癒が目を「開く」という言葉で言い表されたことで「ダビデの子」たるイエスによる終末論的な救済の意味合いが込められたということである。

病になると、それまで何の苦もなくできていた日々の単純な動きやリズムも、実は決して当たり前のものではなかったということを知り知る。病は、身体的な苦痛だけでなく、社会から切り離されることの無念さや孤独、予後や将来への不安をもたらし、それが差別となつて当事者を苦

しめることにもなる。殊更そのような問題を扱う内容であるがゆえに、差別語とされる語句についてはできるだけ避ける、あるいは説明を付けるなどの細心の注意を求めたかったところではある。

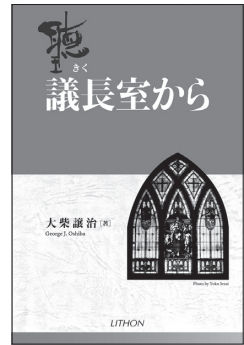
本書の各論考は、聖書正典のみならず、偽典・外典や死海文書にも及んでおり、それらとの関連の中から「聖書の信仰」を浮き彫りにしようとする視野の広いものとなっている点特徴的である。このようなエキユメニカルな活動を目に見える形で示すべく、講演・論考を担われた各講師のみならず、論考を一書にまとめ上げられた編者ならびに出版社の労に敬意を表する。

(やまよし・ともひさ) 北星学園大学教授
(四六判・二五一頁・定価二二〇〇円・リト)

「神の霊による魂のケア」

の記録

〈評者〉
窪寺俊之



聴議長室から

大柴讓治著



大柴讓治先生が新著『聴議長室から』を出版された。現在、日本福音ルーテル大阪教会牧師であるが、二〇二三年五月までの五年間、日本福音ルーテル教会総会議長の重責を担っておられた。多忙な働きの中で、時間を見つけて教団の機関誌『るうてる』に毎月、時々の問題を取り上げてコラムを書いてこられた。その内容はキリスト教信仰の本質を的確に説明したものや、混乱した社会の苦悩の癒しをキリスト教会の立場から語ったものまである。実に広い領域に関心を持っていて、神学、哲学、心理学などに触れている。それがこの本の内容に深みを与え、読む人の心を掴んでいる。

紙面から大柴先生のキリスト教への深い思いや熱意が伝わってきて、引き込まれて読ませていただいた。牧師の家庭に生まれ、大学では哲学を学び、キリスト教神学に引か

れてご自分の信仰やキリスト教理解を深められたことがわかる。この本の特徴の一つは、大柴先生が「聴」くことを大切にしていることである。上からの目線ではなく、牧師や信徒の目線を大切にしている点である。そこに大柴先生の人柄や牧師の立場がよく出ている。

全体は見開き二頁で一つのテーマがまとめられていて、要点が簡潔に書かれていて読むものには非常にありがたい。また、難しいことをわかりやすく語ることに努めておられることがわかる。例えば、次のような文章がある。

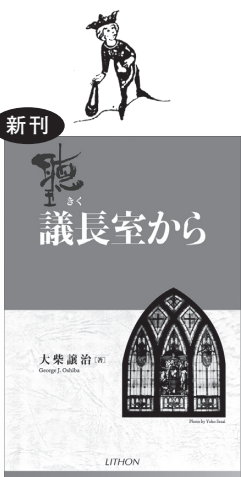
NHKの大河ドラマに宮本武蔵が取り上げられたことが書かれている(七四―七五頁)。少し紹介する。武蔵は新陰流の柳生石舟斎に出会い、戦いを交わすが敗北する。石舟斎は武蔵に「お前は風のそよぎを感じたか」と尋ねる。武蔵は相手を倒すことばかりを考えて、外界で起きること

は何も感じていなかったことに気づく。次の文章は大柴先生の文章である。少し長いが引用する。

「このエピソードは私たちに、内に閉ざされた自己完結的な生を越えた、外に向かつて開かれた対話的な生の次元があることを教えています。マルティン・ブーバーの表現を借りれば、根源語（われーそれ）だけを語る次元から根源語（われーなんじ）を語る次元への神の恩寵による突破です。私たちは何かに燃えている時にも、逆に何かに悩む時にも、周囲が見えなくなることがすくなくありません。そのような時には五感を開いて周囲の世界を感じてみる。するとそれまでとは違った視点が与えられ、見えなかった次元が見えてくることがある。私の関わっている『グリーンケア』や『スピリチュアルケア』は、ケアの中心にこのよ

うなダイアローグ的な在り方を据えています。」とある。ここでは、宗教哲学者マルティン・ブーバーが紹介されている。そして大柴先生が関心を持ってしているグリーンケアやスピリチュアルケアの領域にも触れている。この新著全体に流れている温かさや思いやりの心は大柴先生が牧師であり、グリーンケアやスピリチュアルケアにも深い学識をもち、ケアの感性を磨いているからだと理解した。学びつつ、実践し、実践しつつ、研究し、神様の御国の建設に労力を惜しまない大柴先生の一端を垣間見ることのできる一冊である。教職者にも信徒にも学びの多い本である。

（くぼてら・としゆき 関西学院大学神学部元教授）
（四六判・一三五頁・定価一〇〇円・リットン）



新刊

聴きく議長室から

大柴 譲治 著
George Chiba

LITHON

聴きく議長室から

大柴 譲治 著
日本福音ルーテル大阪教会牧師

●四六判並製 135頁
定価 1,100円

著者が日本福音ルーテル教会総会議長在任中(5年間)のJELC機関誌『るうてる』のコラム「聴きく議長室から」を収録した。コロナ下による変則的な任期の中で「『神のみ言葉に聴く』という姿勢を貫くことができたことが、私自身を支えてきました(あとがきより)」。スピリチュアルケアの専門家による、「神の霊による魂のケア」の記録であり、カラージュセラピーとも呼ぶであろう。

ISBN978-4-86376-098-1

LITHON [リットン]

〒101-0061 千代田区神田三崎町2-9-5-402
☎ 03-3238-7678 FAX 03-3238-7638

日本文化の深層や日本人の 心の深みを浮き彫りに

〈評者〉 木村庸五



改題改訂増補新版

「日本教」の極点

母子の情愛と日本人

西谷幸介著



評者は以前本書初版の書評をしたことがある（季刊誌『教会』一二二号）。このたび、本書は改題され（旧題は

「母子の情愛——日本教の極点」）、さらに補遺として「不当な連れ去りか母子の情愛の帰結か——日本人母親によるアメリカからの子どもの連れ帰り」の項を加え、改題改訂第二版として刊行された。改訂再版が出るほどに日本人論への関心は依然として続いていると思われる。

この補遺は、ここ数十年間の三百五十件ほどのアメリカ人父親と日本人母親の離婚に際し、そのほぼすべての事例で日本人母親が子どもを日本に連れ帰った、という日本人母親独自の顕著な現象に注目している。こうした場合、一般には、子を連れ去る父・母の割合は二対一であるにも拘わらずである（本書二二三頁）。そして、著者は、この現象が日本文化の内包する母性原理、「母子の情愛」に由来

することを指摘して、その「日本教」の解明・探求のさらなる前進を示した。

一九七〇年以降、山本七平が「日本教」概念を用いた日本人論を展開し、注目をあびて久しいが、本書の著者は、その後公にされた様々な日本人論を踏まえ、日本人の宗教的内奥に厳存する日本固有の究極的価値観を究明し、日本文化の核心に迫り、それに起因する特徴的な社会的振舞いを解明する。「宗教は文化の内実、文化は宗教の形態」との基本に立ち、解明の手法として文化的事象から帰納的にその内実である宗教的価値観を解明する。日本人は人間味をことのほか重視し、神学は持たず人間学が思想や宗教に優先する。日本においてはキリスト教徒も日本教に包み込まれ「日本教徒キリスト派」となり、仏教徒やマルクス主義者は「日本教徒ブッダ派」「日本教徒マルクス派」とな

る。その日本教の核心は何か。

日本人は施恩には報恩を期待し、恩の合理的貸借関係を律義に守る。

著者は、①日本の人間関係は内密な二人称関係を通して成立するとする森有正の二人称関係論や②河合隼雄の日本人の「母性」優位論の指摘を、日本人論、日本教解明に寄与したとして評価する。精神医学においては一九七六年以降精神科医の古澤平作が阿闍世物語の紹介を通して「日本社会は母性社会である」という命題を提示し、これに沿って小此木啓吾と北山修が「阿闍世コンプレックス論」を展開し、父子の罪の因果であったフロイト理論に並ぶ有力な精神分析理論を確立した。古澤は物語を父子の罪の因果のテーマから「母子物語」へと変容させることにより臨床的にも有効な精神分析論を築いた。

さらに土居健郎が導入した「甘え」概念により、乳児が自己と別存在者である母を求める行為に準じ、相手の好意を当てにして甘え振舞う日本社会独自の現象をとらえた。

著者は日本教の核心に迫る概念としては「母子の情愛」という表現が至当であるとしてこの日本的な情緒を中心概念に据えて日本人論を展開した。母子の間には無制限の施恩と報恩関係が成立するが、他人どうしには恩の合理的な

貸借関係のルールが適用される。

本書第三章においては、脳死臓器移植をめぐる日本人の特異な反応の分析を通じて、施恩と報恩に関する理論を実証的に裏付けている。脳死臓器移植に対する日本人の著しい消極性と、生体肝移植に対する積極性を、日本人の恩の貸借関係の特性から説明する。後者では血縁間の場合、恩の受贈の負い目に悩まないが、脳死臓器移植の受け手の場合は、他者の「施恩」に「報恩」することができず、負い目を感じてしまう。

著者は「おわりに」の部分において、神社本庁が一九九九年に公刊した英文パンフレットにある「神道信条」五カ条を訳出し、コメントした。日本文化の深層、日本人の心の深みにこびりついている古来の価値観が、この「神道信条」によってようやく活字化された。著者が願うように、神道側からの更なる説明を期待する。

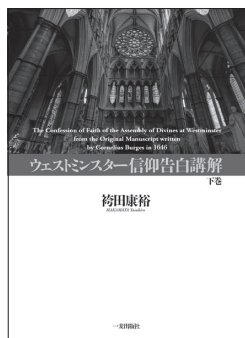
本書が扱う問題は、評者が関心を持つ天皇に対する日本人の心性、靈性の根底にあるものの解明や、日本の国家・社会・国民意識の構造の分析、変革の指針の提供に大いに資すると思う。

(きむら・ようご) 日本キリスト改革派湖北台教会長老・弁護士

(新書判・二四〇頁・定価一四三〇円・ヨベル)

改革派・ピューリタンの信仰の 歴史的意義の解明と集大成

〔評者〕 坂井純人



ウエストミンスター信仰 告白講解 下巻

袴田康裕著



ウエストミンスター信仰告白講解（上巻）に続き、下巻が刊行された。本書は上巻に続き、宗教改革の重要な主題である救済論と教会論、終末論の領域における御言葉の解明に光を照らす、ウ告白の後半部分の講解である。本書は、著者の長年の研究成果を踏まえた重厚な考察により、ウ信条全体を生み出したピューリタンの・改革派信仰の精髓を歴史的背景の分析とともに、その信仰内容を網羅的に解説している。

構成は、ウ告白の救済論における神の恵みへの応答としての、第16章「良き業」論に始まり、教会論を経て、第33章の「終末論」に至る主題の解明である。

本書の特色と価値は、まず、第一に、読者に対する丁寧で配慮に満ちた構成にある。具体的には、厳密な本文研究を土台に、同時代の改革派諸信条との関連個所が付記され、

各種の翻訳と、訳文の検証結果を（註）で示し、さらに、〈解説〉で、教理的、信仰的内容が解説されている。第二に、本書は、宗教改革の意義を存分に考えさせる教理史的背景の解明に有益である。特に、教理史的背景としての、対ローマ・カトリック、プロテスタント陣営での対ルター派（良き業、聖餐論におけるキリストの臨在理解等）との異同、また、教会論では、教会と国家との関係をめぐって、再洗礼派やエラストス主義者との違い、国家に対する教会の霊的自律性を主張するウ告白の立場の解説等は、改革派、長老主義教会の形成過程と存立意義を理解する上で、重要である。

上巻の推薦文で、水垣渉氏が述べていたように（「本のひろば」二〇二三年三月号所収）、聖書神学的考察と、教理史的背景と神学的主題の追及についても、本書を手引き

にするなら、読者は、さらなる神学的視野の広がりへと導かれるであろう。

第三に、本書は、神学校のみならず、教会の実際的な学びの場で、講じられ、積み重ねられてきた信徒の方々の共有財産であることが心に刻まれる。全体を通じて一貫する基調は、御言葉の真理を正確に解き明かし、御言葉を、私たちは、このように承り、主への頌栄をささげます、と告白する礼拝者の姿勢である。つまり、御言葉によって教会を建て上げる信仰者の言葉として紡がれている。著者が、上巻の「あとがき」で記された、ウ信仰告白を採用してきたスコットランドの教会と神学の足跡を辿る研究を続けたいとの思いは、下巻を読み、筆者もその必要性を強く感じた。なぜなら、信条の採用と実際の適用は、空文化されては意味がなく、信仰告白文の文言が、信仰の実践に適用され、教会の靈性を涵養してこそ、その意義がはかられるからである。この告白文が、神の御言葉の普遍的眞理性を証しするとともに、福音宣教の面で、各国の教会の歴史の中で、どのように採択され、適用され、どのような教会形成の実を結んだのか、が今後も問われ続けるであろう。

筆者自身も仕える教会で礼拝前、後、各クラスで何年も、ウ小教理、大教理、信仰告白を講じる機会をいただいた。

長年かけて振り返ると、ある種の手ごたえも感じる半面、時代背景と使用言語、文化の相違からくる適用面での難点を感じたのも事実である。しかし、本書の登場により、この課題に対しても、より大きな助けと靈的益を奉仕者と会衆は、共に得るであろう。

神学生時代から、同氏と共に学び、日本における改革派信仰、長老主義教会の形成のために、ウ信条研究が必須と知らされた時から、着実に、学究を重ね、先達の研究成果を自らの開拓的分野とも言える本書へと結実させた畏友の努力に敬服する。

本書には、学問的成果に加え、実際の、現代的なキリスト者の生の課題にも光を当てて、読者の心の奥底に届く言葉が随所に見られる。ここに、牧会者であり、神学教師としても、堅実な伝道者養成に、献身してこられた著者の祈りと姿勢が表れている。本書は、神の御言葉を受けて、その意味を神学的に究明し、宣教する姿勢を、信条研究により、示す稀代の良書である。今後、この分野における研究書のスタンダードの一つになるであろう。

(さかい・すみと＝北米改革長老教会日本中会東須磨教会牧師、神戸神学館教師)

(A5判・三九六頁・定価五二八〇円・一麦出版社)

既刊案内 (2023年10月～2023年11月)

編・著・訳者	書名	判型	頁	定価(税込)	版元	発行日
日本キリスト改革派教会訳	ウェストミンスター 小教理問答 ——日本キリスト改革派教会 公認訳	新書	70	880	教文館	10/4
袴田康裕著	コリントの信徒への 手紙二講解〔下〕 ——6-13章	四六	284	3,080	教文館	10/4
大嶋重徳著	改訂新版 自由への指針 ——今を生きるキリスト者の 倫理と十戒	四六	218	2,420	教文館	10/11
マリ・ヨアスタッド著 ／魯恩碩訳	旧約聖書と環境倫理 ——人格としての自然世界	A5	344	6,050	教文館	10/18
辻学著	牧会書簡書 現代新約注解全書	A5	759	9,900	新教出版社	10/13
ジャン・カルヴァン著 ／堀江知己訳	イザヤ書註解Ⅰ ——1-10章	A5	590	6,820	新教出版社	10/25
フリッツ・リーマン著 ／赤坂桃子訳	不安という相棒 ——四つのタイプとどう付き 合えばよいか	四六	334	2,970	新教出版社	10/25
西谷幸介著	改題改訂新版 「日本教」の極点 ——母子の情愛と日本人	新書	240	1,430	ヨベル	10/15
川中仁編	宗教と病 ——聖書的信仰の観点から	四六	251	2,200	リットン	10/16
大柴譲治著	聴議長室から	四六	135	1,100	リットン	10/31
吉岡繁著 ／吉岡有一編	汲めど尽きせぬ泉 ——吉岡繁礼拝説教集	A5	170	2,420	一麦出版社	10/17
木下裕也著	新しい人 新しい言葉 ——戦後日本のキリスト教詩 人たち	四六	98	1,980	一麦出版社	10/25
小友聡、木原桂二著	1冊でわかる聖書編 66巻＋旧約続編	四六	192	2,200	日本キリスト 教団出版局	10/25
ブレナン・マニング著 ／山崎雅郎写真 ／日本聖書協会訳	ひと時の黙想 心の貧しい人とは	四六	416	2,200	日本聖書協会	10/31
大頭眞一著	焚き火を囲んで聴く神の物語・ 説教篇8 いのち果てるとも ——申命記・下	新書	232	1,210	ヨベル	11/7
近藤勝彦著	キリストこそわれらの平和 ——エフェソの信徒への手紙 講解説教	B6	242	2,200	教文館	11/8
旧約新約聖書大事典 編集委員会編	〔縮刷版〕旧約新約 聖書大事典	A5	1456	29,700	教文館	11/15

編・著・訳者	書名	判型	頁	定価(税込)	版元	発行日
旧約新約聖書大事典 編集委員会編	[新装復刻版] 聖書地図	B5	48 他	3,740	教文館	11/15
ロバート・W. プリ チャード著/西原廉太 監訳/中原康貴訳	アメリカ聖公会の歴史	A5	468	5,720	教文館	11/21
田淵 諭 著	光と祈りの礼拝堂	B5 変	320	3,960	教文館	11/22
日本基督教団事務局編	日本基督教団年鑑2024年版	A5	550	3,520	日本キリスト 教団出版局	11/17
望月麻生監修・著/小 林路津子、新井 純著	保 育 者 の 祈 り ——こどものために、こども とともに	B6	96	1,320	日本キリスト 教団出版局	11/24
『交読詩編 聖書協会 共同訳』編集委員会編	交読詩編 聖書協会共同訳	B6	176	1,650	日本キリスト 教団出版局	11/24
松本敏之著	神の民の解放 ——出エジプト記1～18章に よる説教	四六	298	2,090	キリスト新聞社	11/22

原始キリスト教の

東京大学名誉教授
大貫隆著

「贖罪信仰」の起源と変容

圧倒的反響!



贖罪信仰そのものが、いまだ議論と再検証の卓上に置かれている！ イエスは人類の罪を贖うため身代わりとなって神に裁かれ十字架で死なれた。この「贖罪」を「キリスト教信仰の要諦」とする考えは、何処を起源とし、いかなるプロセスを経て変容・発展・定着してきたか。贖罪信仰の核心に迫り、キリスト教の再構築を静かに促す。

四六判・三〇四頁・二二〇〇円

富田正樹著 新型キリスト教入門 その1

四六判・一九二頁・一五四〇円

疑いながら信じてる50

忽ち再版出来!

「疑いながら信じる」以外の信じ方って、ある？ できる？ 私は疑いながら信じています。キリスト教を信じる人たちの中には疑いなど全く抱かずに、まるっきり無邪気に信じ込んでしまっている人がいます。それはそれで結構……でもどう展開しますか、歩みますか!?



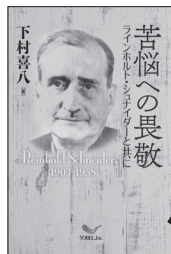
下村喜八著

「京都府立大学名誉教授」
四六判・二五六頁・一八七〇円

苦悩への畏敬

ラインホルト・シュナイダーと共に

シュナイダーが生きているかぎり、ドイツは良心をもっている。ナチス政権下にあつてドイツの良心そのものを生きた詩人、思想家のシュナイダー。深い敬慕を込めて辿る。キリスト教理解を根底から一変させた生き様に倣い、この時代と闘う。



青野太潮「聖書の真実」を探究する

どう読むか、聖書の「難解な箇所」

3版出来！ 「大いに疑問を持つ」探求者に、聖書は真実の姿を明かし始める。



「大いに疑問を持つ」探求者に、聖書は真実の姿を明かし始める。 訳語、解釈の如何によって天地が入れ替わるほど真逆の結論に導かれてしまう。この難解さとう向き合えばよいのか。その「難解な箇所」を敢えて取り上げ、正面から挑んだ！ 青野太潮の「どう読むか」、好評第2弾。新書判・一三二〇円

西谷幸介 母子の情愛と日本人

新書判・一四三〇円

「日本教」の極点

新書判・一四三〇円

日本には、神道でも、仏教でも、キリスト教でもなく、「日本教」という宗教が存在しているに過ぎないのか。人々の意識や宗教観に織り込まれた「母子の情愛」と日本社会の深層をたどる。改題改訂新版

金子晴勇責任編集

ドイツ敬虔主義 著作集 全10巻

定期的な著作集刊行開始!

- 第1巻 シュペナー「敬虔なる願望」佐藤貴史、金子晴勇訳
- 第2巻 シュペナー「新しい人間」山下和史、金子晴勇訳
- 第3巻 シュペナー「再生」金子晴勇訳
- 第4巻 フランケ「回心の開始と継続」菱刈晃夫訳
- 第5巻 ベンゲル「クレンモン」と「歩んだ道と言葉」金子晴勇訳
- 第6巻 ツインツェンドルフ「福音の真理」金子晴勇訳、金子晴勇訳
- 第7巻 エーティンガー「自伝」喜多村得也訳、金子晴勇訳
- 第8巻 エーティンガー「聖なる哲学」喜多村得也訳、金子晴勇訳
- 第9巻 テルステイゲン「真理の道」金子晴勇訳
- 第10巻 ドイツ敬虔主義の研究 第8巻 四判上製・二八八頁・二二〇〇円

書店名	郵便番号	住所	電話	ファックス	URL	メール	郵便振替
北海道キリスト教書店	060-0807	札幌市北区北七条西6丁目	011-737-1721	011-747-5979	http://www.jp-shop.com	sasaki@jp-shop.com	02770-2-56520
善隣館書店	020-0025	盛岡市大沢川原3-2-37	019-654-1216	共用		zenrikan_system_0530@ghoo.co.jp	02350-0-874
エッセイの木	980-0012	仙台青葉区1-36 靱帯センター・エッセイ	022-223-2736	共用	https://sendaicbs.uccj.jp/	info@sendaicbs.uccj.jp	02230-0-31152
恵泉書房	260-0021	千葉市中央区新館2-2 千葉カリスチャペルビル	043-238-1224	043-247-3072	http://www.keisen.christian.jp	keisen@vestia.ocn.ne.jp	00120-9-43619
教文館	104-0061	東京都中央区銀座4-5-1	03-3561-8448	03-3563-1288	http://www.kyobunkwan.co.jp	xbooks@kyobunkwan.co.jp	00120-2-11357
待晨堂	167-0053	東京都杉並区西荻南3-16-1	03-3333-5778	共用	http://taishindo-books.jimbo.com/	taishindo@ej.com.home.ne.jp	00110-8-95827
バイブルハウス南青山	104-0061	東京都中央区銀座4-5-1	03-3567-1995	03-3567-4435	http://biblehouse.jp	biblehouse@bible.or.jp	00160-2-18410
東京キリスト教書店	162-0814	東京都港区新小川町9-1日キ坂内(外販専門)	03-3260-5663	03-3260-5637		tokyo@nikkiban.co.jp	00130-3-60976
横浜キリスト教書店	231-0063	横浜市中区花咲町3-96	045-241-3820	045-241-5881	http://www.tuighte.ne.jp/~yokohamacs/index.html	sksch@mvva.biglobe.ne.jp	00250-4-2512
清光書店	951-8114	新潟市営所通一番町313	025-229-0656	共用			00560-8-51419
静岡聖文舎	420-0866	静岡市葵区西草深町20-26	054-260-6644	054-260-5612	http://www.s-seibun.co.jp/	info@s-seibun.co.jp	00810-8-26558
名古屋聖文舎	466-0045	名古屋市昭和区16日本キリスト教団鶴橋駅前	052-680-8090	052-680-8091	http://nagoya-seibunsha.la.cococan.jp/	nagoya-seibunsha@nifty.com	00810-5-14073
京都ヨルダン社	602-0854	京都市上京区荒神通河原町東入ル	075-211-6675	075-211-2834	http://web.kyoto-net.or.jp/people/kjordan/	kjordan@mbox.kyoto-net.or.jp	01010-2-594
大阪キリスト教書店	530-0013	大阪市北区茶屋町2-30	06-6377-6026	06-6377-6027	http://osekacbs.web.fc2.com/	ochrbook@river.ocn.ne.jp	00990-3-43009
神戸キリスト教書店	650-0021	神戸市中央区三宮町3-9-18三陽ビル2F	078-331-7569	078-945-9388		kobex@nikkiban.co.jp	00170-2-421390
広聖文舎	730-0841	広島市中区舟入町12-7	082-208-0022	082-208-0177		hseibun0951@yahoo.co.jp	01360-4-1958
リバーサイドブックス	779-1105	徳島県阿南市羽ノ浦町古庄大道ノ西13	090-8694-4986	050-3142-3017		ykwb3@gmail.com	16220-17974891
松山キリスト教書店	790-0804	松山市中一乃町1-23	089-921-5519	089-921-5413	http://www.gojocs.jp/roshiyama_1007/index.html	sksch@dokidoki.ne.jp	01650-1-2120
新生館	810-0073	福岡市中央区舞鶴2-7-7	092-712-6123	092-781-5484	http://www.simseikan.jp/	info@simseikan.jp	01750-5-10932
キリスト教書店ハレルヤ	862-0971	熊本市大江4-20-23	096-372-3503	共用		k-haleruya@bible.or.jp	00160-2-18410
沖縄キリスト教書店	904-2143	沖縄県沖縄市知花4丁目12-33	098-927-0220	098-938-1102	https://www.okinawacbs.net	info@okinawacbs.net	01790-4-152916

※一般書店関係の方は 日キ販営業部 TEL 03-3260-5670 にご連絡ください。

福音と世界

2024年2月号

特集Ⅱ心の時代と宗教

〔責任編集Ⅱ若名定道〕

寄稿者Ⅱ林 研、杉岡良彦、濱崎雅孝

家山華子、上田直宏、松島公望

好評連載 八木重吉の聖書（今高義也）、地域から考える在日朝鮮人史と教会史（金歌昊）、「日本のキリスト教」を読む（山口陽一）、新約釈義ルカ福音書（山崎ランサム和彦）、古代イスラエル文学史序説（勝村弘也）ほか

A5判・定価660円・〒70円

定期購読についてはお気軽にご相談下さい。

新教出版社 TEL: 03-3260-6148

Email: sales@shinkyoy-pb.com

から室集編

先日、中央区まるごとミュージアム二〇二三という文化イベントで旧

築地居留地の歴史散策に参加した。約五十名の参加者があった。

散策の前に築地居留地研究会理事

の中島耕二氏からパワーポイントに

よる詳しいレクチャーを受け、その後散策に出発した。

百五十年前、居留地開設に伴い多くの宣教師が来日し、教会、ミッションスクール、神学校などが多数誕生した。

明治学院、立教学院、青山学院、女子学院、立教女学院、雙葉学園、暁星学園などがこの時創立された。慶應義塾も

居留地開設前の築地中津藩邸で生まれた。福澤諭吉は後年

二人の息子を居留地の宣教師のもとで英語を学ばせた。

また山田耕筈は少年時代を居留地で過ごし、そこで聴い

予告

本のひろば

2024年1月号

本・批評と紹介

（巻頭エッセイ）吉田 新（特集）「イスラームとユダヤ教、キリスト教の関係を学び直すならこの三冊！」（書評）下村喜八著『苦悩への畏敬』、辻学著『牧会書簡』他

た讚美歌やピアノの旋律が、後の大作曲家の源になったと説明を受けた。芥川龍之介も生まれは居留地であるそうだ。

私が働いている日本聖書協会も、この時代にスコットラ

ンド聖書協会、米国聖書協会、英国聖書協会の三つの聖書

協会が横浜で日本支社を設立し聖書普及活動を開始したの

が前身である。その後これらが銀座に移転し、日本聖書協

会が設立された。

今回の歴史散策を通じ、数々の学習の機会を得ることができたとともに、この時代に来日した宣教師たちの情熱や働きを再発見することができた。今後の自分の仕事に活かしていきたいと思う。

（加藤）

旧約聖書 預言書

要約と概説

好評の入門シリーズ完結!

宮平 望著 イザヤ書からマラキ記まで17の預言書を全章とりあげ、その使信を福音的に読み解く。旧約聖書の通読と独習が楽しくなる好著。全4冊完結!

◆A5判・定価2530円

不安という相棒

四つのタイプとどう付き合えばよいか



フリッツ・リーマン著／赤坂桃子訳 私たちの人生の一部である不安に上手に対処し、良い人生を送るためにはどうすればよいか。本書は精神分析的な視点から不安を四つのタイプ・対応するパーソナリティに分類し、より良き対処法を豊富な例証と共に記述。1961年の初版以来今日まで百万部近くを売り上げた戦後ドイツのベストセラ―。

◆四六判・定価2970円

イザヤ書註解I

1—10章

好評

ジャン・カルヴァン著／堀江知己訳 1551年に出版されたカルヴァン初の旧約註解。ヘブライ語の深い知識に基づき、いかに真剣に預言書に取り組んだかが如実に伝わる。邦訳全5巻。

◆A5判・定価6820円



内村鑑三 闘いの軌跡

関口安義著

内村の激動の生涯を実証的な調査に徹して描き、新たな内村像を提示した評伝大作。著者は芥川龍之介研究から出発し、芥川人脈の多くの知識人の評伝をものしてきた。本書は『評伝矢内原忠雄』に次ぐライフワークであり、遺作となった。

◆A5判・定価7975円

▼同じ著者による既刊

評伝 矢内原忠雄

生涯をつぶさに追跡した
矢内原伝の決定版

◆A5判・定価8800円

反響!

いのちの水

[作] T.ハーバー [絵] 望月麻生
[訳] 中村吉基 待望の復刊!

本来誰でも飲めた湧水なのに、いつの間にか閉鎖的な礼拝堂になってしまった悲しい泉の物語。

◆B6判・定価1650円

牧会書簡

現代新約注解全書

辻学著 (つじ・まなぶ氏は広島大学教授)

「第一テモテ」「第二テモテ」「テトス」の3書簡を徹底的に読み解いた世界最高水準の注解書。『福音と世界』連載に加筆し堂々完成。邦語で類書のないきわめて貴重な労作。

◆A5判・定価9900円



聖書のお話を 子どもたちへ

小見のぞみ

2024年1月24日刊行予定

伝わるお話のための3つのポイントや、お話づくり4ステップ、お話の5つのタイプなど、現場で役立つ待望の手引き書。CSで、またキリスト教幼稚園・保育園で、子どもたちの前に立つすべての人に。

◆四六判 並製・128頁・定価1,540円

好評発売中 『非暴力の教育 —今こそ、キリスト教教育を！』 小見のぞみ 定価1,760円

日本カトリック教会の音楽

明治期から昭和初期まで・宣教師らの軌跡とともに

時津ハイツ／大津磨由美

2024年1月25日刊行予定

明治期以来の日本語聖歌集、日本人による聖歌、音楽を用いた宣教、グレゴリオ聖歌研究と受容……開国から戦中・戦後に至るまでの日本におけるカトリック音楽に関する論考20編を、豊富な図版、資料とともに収録。◆A5判 上製・408頁・定価6,820円



好評発売中 『日本における讃美歌 Hymnology in Japan』 手代木俊一 定価7,150円



証言・満州キリスト教開拓村

国策移民迎合の果てに

石浜みかる

2024年1月25日刊行予定

かつて日本の生命線と言われた満州国。その傀儡国家に国策として送り込まれた多数の農業開拓団の中にキリスト教開拓団があった。敗戦と共に悲惨な最後を迎えた団員の貴重な証言集。

◆A5判 並製・240頁・定価3,300円

本のひろば.com

